和歌雨前集 玄友

713
1132
1

1 13
1132
1-4

大正十二年二月
秘書官室氏寄贈

1 13
1132
1

文政七年十二月　大江廣海

望遊 三七　三月三日 三八　曲水宴 三九
菫苑 菫菜 四十　梔 四一
躑躅 四一　藥 四二　蕾代 四三
梨苑 牡丹 四五　馬酔木 四四
霧苑 四七　菩薩 四八　數多 四六
三月尽 四九　殘春 四六　將来 四七
潤三月尽 五十
この郎
夏 五一　更衣 五二
緑苑 五三　移植 五三
垂苑 五四　郭公 五九
菖蒲 六十　藤 五六　擱 五九
五月五日 六一
早苗 六三　擬 六四　重擱 六六
五月雨 六五　水鶏 六六

巻ノ二

納涼 八三　曉夜 八四
六月祓 八五

和歌あまる社山ふもと美雪の一

春の部

○春

かきろひの　あつきゆふべと　なりにけり
うちわたすなり　ふもとの里の　打ちそよぐ
木の芽もる　ころもはる　春のそら
春されば　まづさきそむる　梅の花
春されば　かをるまつ風　さほひめの
春の山ふく　さほひめの　春日かすそ
○年内に春　きたるにまぎる　ふるさとに
ふるのうちにも　さくら花　年はゆきふる　ものながめ
をいひそめの　ふれをよくまもるよし　おとづれよ

もちひろげつゝめ　妻のそう礼　人の何も　そ代百年の
妻のよことも　去ぬきこと　ほゝ〳〵夜ふ　きのみをこゝ
なりかへる去　明れハうすむ　ちもりくに
まもの之　等比まつる　ゑの裾くも
去のくもすそ　まの初そう　まちてをうみて
そうつゆえ　そうこと也す
五十　久うのためそう西此ゆへ　妻
〃　今こてまきれハまれ　ふもの好
元　新しきまのつめよりふもいむれるか　直聖
古　まをあくへハいくる等のなるあ
、　和ちて話しるれまれるをまくほう之風やくう　み之
注　参る庭と申つるう所まきこゝあ〳〵ぬ吉比元とこゆう　羽恒

〃　今年ハ萩のやけかきかて　これまんと誰をはきせん　乗堂
拾　まを夜いてうをこれハ　ふるのくいとまてゆうなりけり　文幹
〃　あるおとこ　ふ頃あ　たまるうあれうく　京性
六　きのやう度を志くに而　之の妻社ちへハけまを　みくえ
〃　等のこ義してうあるなハまれもの　なふてこれけ　まえ義
〇元　日　もまはてう　つゐちれ
正月数をゐ此の梯子にハえの高をもつあまう　まくの
儀式あるをあるう等くみれと下はうくハんすへきう
そのはめ　月日のいつめ　こそのそうめ
まあるぬ　今代の初そ　ほゝくいまふ
板のうまう　今ふこそ　明れハ雪む
まこそうくて　等そ也をこめて　そうそうくる

山川の水も　人のこころも　けしきこそ立
とこそいふめ　山のそら
いつるはも　くさこそなべて
人のくる　山のまもなし　さほひめの
時つ風　野あけの宮も　けさ霞む
ものこそ　池のさ波
年のあく　きそめもろ人
むつまじは　あらたまる　春代より
栄え初めよかくしてこそ　亀松
〃　あらたまの春のはつ花　千代ふべき
元旦　春を経て　なほ行末に　あらじきの
〃　あらたまの春のはつ花　千代ふべき　法舎
古　ひさしき年の始めよかくしてそ　大臣歌

拾　春立つといふまもなくや　山かげさえ
六　ひろく　ひろこよひを百とせの
〃　春の山里のうら古い　つ消てけさ
〃　きの雪そ　ふれ〳〵まそ霞かすれ
の初春。早春　まのそら
二絵　におれて　西方初旬を
のこをもる　大空
春立ちぬ　まそ深
明れば霞む　むすめも
雪のそら　霞も
春来ぬと　まきくる
天津そら　霞む

○春ノ氷　まだうすらひ

まだきてもまのあたりなるよしを又詞書ある
よしもそのまゝむすびよしをよむべし

うちとくる　とくることゝる

すこしむすぶ　むすびそめるとも

氷れるうち　氷のすくれき

流れのこゝろ　まだうすらひ

さえ之まゝ　まだうすらひ

日影さして　氷のゆるみ

いさゝかなれ　とくることゝも

解てめぐる　谷川の水

水のこゝろ　水のゆるみ

古　谷風にとくる氷のひまことに打出る浪やそ初瀬　曽祢

○雨水の事はやはりとくる春風や浦の氷をけすとくらん　友則

格　春くれバ山田の苗代水ぬるみ人のくちまねく　元方

六　春風のかすめる時ハ雨水ニ成ル

○二ノ日　初午の日　おもてなるべし

正月午の日に祭ル所にて小松を引なる祝ひ人をまねきをきいそぶくをよむべし又やしろにて但し社頭なれバにハ松を引とよむべからず

上ノ子日を初ノ日といひ後を申ノ日といふ

子の日する　小松原　姫小まつ

二葉ぶり　松のふさわか　ちとせのこまつ

野べの小松　ひくる子日　ねこそまつ

まつるて　引ふね　おかまち

さつまを祝ふ　松のわく〳〵　雪裂なる松　堅へのもろく
　　　

せり　なづな　すゞな　すゞしろ　大根　おきやう　蒲公英草　たびらこ　かゝらけな　ちゝとぎ
ほとけの座　蓮花　すゞ菜　ゑんどう
法もし　つゝえる
二ねぎ　ふる　初ふゝ
うつぼぐさ　ゑぐ
まつよひぐさ　月見草　つきそめ
つゝじ　つゝむ　庭菜
深せり　みる〻
野もの〳〵　野沢
ゑのこ草　野老　あさ漬
ぬかご　ながいも　まこも漬
ぎぼうし　ぎぼうしの水
ぎぼうし　ぎぼうし花

ちゝめる葉野
神ぶき　いぶき　ふゝれ
散の望　おひしば
うつぼもろこし　ぬか〳〵
素菜　ぬかご
名所　陵墓小野　雑波　日吉原　里
砂田　布留の中道　奈良坂　名所
万八　あしびきの八つ尾つゞら　赤人
〃　春山のさかのまつかげ　ふみ　屋連
〃十　春うらゝ山田のあぜ　ゆきげの水　ぬめり　候人
古　うぐひすの鳴　梅の香　清水　ぬれ　梅　一方代
〃　春日野　ふゝれ　梅　一方代　赤人

古 実ならぬまゐらせにくるれつゝ 紀於帝
反 たゞよふれはなくて 春興集
〃 あるのくるよりといふ 新明題集
拾 撃へこれいつれ掲ろうへ
〃 ほそろろのかきいふ学のあり 田舎院
〃 まのみまおくのまいつほ
六 いつれもまをくへいふ
〃 いろへぬ人の志のへまゐ
○霞 霞こもる 霞ほひく たれをく
霞いまこもきまいろくよあるまろ霞しもろ
る空よいふ初春の霞をよもへ春てはほよて
もなろへ〳〵ゐとゐろうよもをまるとほとゝ

春かいろ 新うる
いふ霞 かをたつ うほ霞
春ろれひく 霞ーく
春ろろる 霞ろきまゐ
立まよふ 霞ゐる
霞の和 新ゐる
霞ろろ てむ霞
霞ろろ 霞ゐそこ
あろれ霞 そこけろれく霞
霞て除き 霞ろかれ
うろれろ みろうこと
ろれちゐよ 風よろろ
のろよ霞そ 鈴ろ新ろうもむ
霞ろろる月 表いの霞 入り新かをむ
夕り行新霞 月ろ九れ 横雲てけをよ
ふろくに あ初まーゐも ろこのつき
霞あよ 暗いくへ ひとへ霞 ぬきうほき
かすろゆく 霞あを分る

拾 まちわびぬ風こそみえね雲井より　行平
〃 吹よとは草木もしをれぬ山風の　素性
〃 あらしの山の秋の夕暮　業平
〃 名こそ流石木の間よりもる月の　純友
六 まちえてしかのなくねにめをさまし　猿丸
〃 今はとてわが身時雨にふりぬとも　小野小町
〃 かきくらす心の闇にまどひにき　藤原敏行
〃 雪ふかき山のかけはしふみわけて　素性
〃 ものおもへやすくも世をすぐすかな　小野小町

拾 ふきかへす　あきかぜ
〃 こころせよ　あきはきぬれど
〃 あきの野の　あさつゆ
〃 やへむぐら　あれたる
〃 なにしおはゞ　あきもきてとへ
〃 雲の上は　波路をかけて
〃 よる波の　おとも
かすめる雲の　かすむにそ
万十 ふるさとを　向山こそ
〃 かきくらし　ゆきふりしかば
〃 こころにも　かゝれまつ

谷よりもいく梅さそへ誘ふ水
法師こゑをせめて学ぶらむ
かくし待えてきけとうにもやうへ
きみる　来ゐる
ふるさとを　ふるさとの
外ぢやうる　竹を移す
志ハなく　春つけく
人ほとよ　人来とれく
うち羽ふく　をやきれけ
すもも　あるかを
あそ春来る　花ちく春

もゝちとりハ　群もろ〳〵
春をつぐふ　雪を吉ふよ
梅のむらさ　梅ぐひの枝
まつうれる　夜をこめそ
ふ代のあるる　ふ春和ふ
花まつころ　ふるし雨き
ねぐらさめて　人まちほ
百よろこひ　梅ぞのゝ与
初花ねぬ　ちらかく
あるれり　梅ようる

名所　小倉山嵐　伏見日　吉野山　難波　梅津　淀

春の野　六木　梅　柳

万六　かせ山の雪をあけて朝ごとに
〃十　梅とさけるをへだてゝ
〃　雪ふりつゝなへてもの
〃　きえやすき
〃　雪ながらもえだにこもれる
〃　梅の雪山ちかく
〃　雪ふりの山谷こえて
古　をちつれ
〃　雪ふりつゝなへてもの
〃　雪ふりつゝなへてもの
反　雪をみいまこゝ
〃　雪ふりつゝなへてもの
〃　妹ゝ家のそひ入にたてる

拾　雪ふりつゝなへてもの
六　山里にすむ人もうれふるなきぬ
〃　うれふれぬものゝとおもへども
○殘雪　のこれる雪　おそ春
雪ふりつゝなへてもの
俤もあり　春ノ雪とかや
消やらぬ
きえ殘る
おそ春の
雪ふりつゝなへてもの
いつもはる
雪ふりつゝなへてもの
山のたるひ

雪ふりつゝなへてもの　吹
雪ふりつゝなへてもの　詠人
雪ふりつゝなへてもの　詠人
雪ふりつゝなへてもの　詠人

五十 梅さくえをゆくくうろふ雪のそら 徳人雪
〃 山ぢ〻ゝ後ろ雪を梅ふもちろかもろくれもひまろかも 〃
古 んさ〻涼くそそもろれハ内あへぬ雪ゑをこゑん 〃
拾 わろその梅ろもひそみもゑ 抹茶筆
〃 雪ゑそあ〻たの糸の雪れ梅ろまめこそれ 雲そ
六 梅死さ〻こまれやそうの山よなゃろゆきのふゑろん 雲そ
〃 まそそて好ふる雪ハ梅ふ内ろくもろかとそふ こつは
○春ノ二首 まゑゆき
まゑ雪そふ行ろ雪とさ〻にうけても
ふるくよめり
まゑゆき ものろ雪 作者ゆき雪
まそゑえて まそもつぬ きえぬろへり

梅さまひて 一ゑそあそふ
そ雪をつまて 雪の名そな
まそ風さえて 雪ろまる
ふるよそへく 風そ雪ぬ
万葉清莵の井のそ雪にるハ志ろ
〃 雪ゑゆゑ梅ろの雪よ梅ろんか 〃
古 まそ雪ろやいつそみゑ梅ろ 〃
〃 雪ろそ雪ゑそもその雪のむのハよふをろへろる 雲之
拾 梅ろえよ降ろゑてそ雪のむのハよふをろへろる 〃
六 まそあろちろそもやみゑの
○後寒く まそゑ
まそゑ梅のそちえかへゑそ雪ゑ雪ゑ雪ゑ

はるかくる　春さりく
まそもいそし　秋をまつ
秋さゆる　雪けの雲
まくらぬ　はゆる朝風
冬にもこゆる　秋くさかれぬ
秋風そ　雪けの風
き、秋そ　まあき野ぬ
風のおと　鈴くもり
春霞　ふみくハ
花ちらま　き、まそよ
二月の　雪風あれ
花のおそ化　雪のふり
まそかえて　風さえて
雪あくれ　二さひふる
秋さゆる　雪けの雲
まくらぬ　はゆる朝風
冬にもこゆる　秋くさかれぬ
時雨そ　雪けの風
うつそ火　春霞そ
春の雪も　まさふるそ
まそきれ　きえすきれ雪
春霞　ふみくハ
花ちらま　き、まそよ
二月の雪も　雪風あれ
花のおそ化　雪のふり
あそ深み　雪けのふるあらし

○俗言のふるくてよけさらぬハえをもあせるまにまに

春立てハ　大汝大神
ふ　さえ残りし風あれど雪降ることもまれなれハ
深みゆけハ　二月のそれ
〃　あそ深みある立ハ春霞　雪風さえくゆきてあれど
射狭丘の山に霞のあそ深まれるも　ふるさとの
〃　ふるさとの　春霞やうら野一波のまくふるまて
〃　たち残り又二月の雪降えてうるふる雪に霞むふの
霞ハさくまくまくま

五五　家さつなくき春のをかさせんといやちかき梅さへ　陸陀
〃六　ひとやとの梅咲くころとなりぬやいかにふまたり芳野山　詠人知
〃八　雲をこふる心とをひし梅ひとりみえしやはるかへ　赤人
〃　ふるさとの梅のえだにあるうぐひすはたにをりてやなん　村上
古　高らかく梅ふくうぐひすなくさとの春の初風　詠人
〃　ふるさとに雪とぞ梅はみえまがふ花なきさとの春の夕暮　友則
〃　雪のうちにはるをしらする梅の花ちりてのちこそ思ひしりけれ　貫之
〃　ちりぬとも香をだにのこせ梅の花わすらむ人の形見ならまし　詠人
〃　梅の花たちよる波のよるごとにたもとのみこそしほたれしか　貫之
〃　梅の花ちりてのちこそ思ひしりけれ

五八 うちはるさ月のほ系の末柳 ハいまゝで末くと朱ようけるも 枝江安
〃十 石ーきの古えくのうつけ末 ハうれとあう柳かも よま歌
〃 系の日にそれる柳をとう枝く
〃 山のまにさいふうつ末ハかえようけるも
〃 新ちく わくる枝等の本うてゆくき 社よやちれ
古 陰ところ系ぶうかくく白等をいせ
〃 末柳の系ぶうまくて社うさハいつもの山のう空をきる
〃 系の日れ新をエ作のくみよハ柳のまゆそ月ハこえは 筑人歌
〃 等の系よるてよ玉柳 さそ
柳 系えよハもれくゆくもも枝
〃 もれ八のまにそ等柳のいとい本くこれちは
六 いちりろ八をい柳れゆけハ社ま子ーすれとも稲筑也 歌京小製

よるくもかれ生枝の系れをハ系ろれ
末のかのうちるこふまやそ
○若草。春草 まくさ
一説ともにそくよあり毗べ
みもすくてかえ生る小等を
かえいつる うちわみ
うえそう 系の毗
海を 雪まもよ
ろくてそう 萩のやけ系
陰ところも 二本
ままのる 雪まち夜
毗くのそ

もろ〳〵まろき　はるさめ　いやおひ
きはもて　　蝶菜　　芽のわき生　おひまさる
つのぐむ芽　　野べの芝生　おのづから〳〵よひくさ
その根も　　てその枯葉　そこここきまこそこぬ
雪ふりかゝり　雪ふりつもる　わらべのつむ　さいこつま
つまれ　　菖蒲の下かげ　　菖の下かげ
ねまるゆる　古名所　嵯峨野の森　陸奥里の巻　水無瀬川の　吉野の桜
春日野の　三笠山の　奈曽社の　那古海岸の
百二ふりわけの髪をみづらゆひ　八わけるまふ去のてよつわる茅むそうまこそ　紀らめ
〃十　おきつ白波もあひそめ　猿人こそ

古　おきつ白波のさわぐを分て　おひ出るそ　つゝ　実分　古人
拾　雪ふれハつれ〳〵そうくしく　ふる枝
六　ゑわらねよけよみゆるそをくのむをりくさ　業平
〃　やあらもそかうちんをみきて　夏のまゝ春こそ　ふえ
〃　たゝや枯そ　それ〳〵その根のうえても　ゆるもそうつゝ
○蕨　早蕨　さゝらひ　ワラビ　初つくし
二歌ともに新古今を節よ　かよひて
下ゆくとハ木を言ふとの下におるをいふ
ゆる　下ゆる　おるゝ　かきつゝ　袋を
柴人　山人　里く　きくおもて
ふるさまも　咲のさつくし　園こそのうち

あつまるおり　ほまれの名　つま木こる杣
谷のさゝめ　おもてうへ　おもしろき
むろさきのちり　あをる風　かさ山さき
下かえいそく　松のこゑ　山のさゝめ
すゝらさゝら　松の下風　音羽の滝を
玄のやけ井　をうをたて　しゐの木陰
名所　小野山　春　さくらの木陰
志のふの関　しゐる葉　武蔵野
万八　忘草　たえの上のさゝめのかぜ　雉
古　はつこちかゆもみぢ　そのもを　鶯
六　こゑ井の山のあをけさ　これは
いもあるよをけさおもふ　花ぐもほのぼのと　月

○春ノ雨　そゝぎ花

大さ井これくさつゝたゝかのこゑ　又
木の芽うるをまたるゝをもおもひ
をもとちう玄とゐけくもよゑ
よとそくもよゑ

玄のちゝめ　まゝめのそ　そゝもつね
ふゝもつね　ふりくそ　新の水
井これくさ　をををそむ　本をゝむ
夜もの玄雨　木のめのゝ　浦世のめくさ
ちくてはる　深もそゝく　里ゝもく
ふるき柏の　つゝそもゆる　時しるあゑ
そゝふる　雪のさゝ　うすむあわ
そのこれふ

こはやる　　今よいくさと　　つもる
くちうつさう　　なのりあはせて　　争ふうれし
春をかすめて　　あまそそく　　山のそ雨る
雨よりほか　　風もえて　　桜ちるなる
ふるさつく　　雨よもる和　　下葉そひゆく　萩のやけ原
田をうるを　　かりそめう　　ふるやの軒　　梅うれて
うつ衣もる雨　　去くゝみ行る　　いやしきふる

五　今ゆてきく物もかりく　　聴つ鳴のと　　淡人春
〃　春ゆおもはけるもはを　　うつ至味ふ敬ふ皆ムヒつ〃
〃　春雨よこそもいふさくとほうもやや　　七日ふうハ七巻うとや〃
〃四　去はおもいき雨に　　桜ないまこはうれくいをつみかも　　永初
〃八　春雨のちくゝふるふる　　雨の山の桜ハいろめうるむ　　東人

古　梓弓　　春雨ふるとはなしに　　ぬれつゝ来つらむ〃
〃　春雨に衣ぬるゝとにはあらじ　　桜を折る人のみぞそいろまさりける　　春雨
〃　春雨のふる八重山吹の　　色にいでゝ　　侍歌
〃　春雨の空の枝よりおれ　　ちる　　列
六　ふるさとに　　見えて　　春雨ハふるとも　　侍人
〃　春雨はふるとも　　ゆきて　　春雨ハふるとも　　侍歌
〃　春雨のふるハ学のもろ　　花をもむるこそうれ〃

○春ノ月

大空雨のうて新の　　ちる
をかもむ〳〵文字　　そいやさかを　　伝へやうにも
ハよりまをいまても　　おほろあり
春の夜の月　　雨のるより
梅さくやと　　雨ひやうこそ

雲のもろひ　雲みよ雲あし　徹さいつる
星そうそく　雲ゆくほし　雲やへ雲
氷れかな　ほそうそねね　花のうへ
雲の庭　氷れの種　徹るやる
うけそそう　雪けの月　哭も世に　氷れかに
木のもも　雲そへくる　あそうかくも　彩の板る
空の本住　うえまてのれ　月のもひ　雲はるく
雲の附しる　雲むようき　うえやへくき　まやむう
抜そまる新　氷しく雪　抜そまる新　氷しく雪
万　かそうれるこ空のみよ月　徹さいつる
さける梅のそのこゆへく　雲はるく
十　氷雲雲日のうれい木るようさよみ雲を以てう結ん〃

〃　雲やふ哭そる抜の月抜そ
〃　たの園れ梅のそそ久方のほそ雪を園抜よこたもりる〃
〃天　雲れそうそ行る月抜る梅のそ抜そ
古　月やうねそやもしのそ彩れ雲やもしのそ彩
浪　去歳れ汁そけうえれ月
〃　そそれ木かれやりそ久月抜
〃　あそ抜の月そそをおるくいこそ哭人なきや
六　行そそれ彩もかれねまやうそ行る雪の月
碧　哭もせそ星そそねそ雪行の後り春よ去く抜そ秋　千里

○春ノ曙

抜のの人そくもの空れみ雪ありやも
そり歩そ雪る抜雪ふそ雪ふ抜雪ふそ雪ふ抜雪ふ

此世うつゝともなきあたなるうそはてねまの嵐　歌仙

○春の風

和ら雪ふをくゝとくゝ梅よ
ゆて八掃ひのこるうつゝ
其の朝風　ゆくる風
雲ゆくとく　紙をくる
ゆくる移る風　雲なき里
此のふをとく　梅もひら
梅のそのよゆく　けむる
夏　雲ゆくる此里の梅の香
古　花のもとへ雲ありてうせ
〃　まん人むのうつゝをとゝきてゆけ

巻ノ一

〃　雪ゆく迄迄山多八きくれて風ふ雪ての雪てくる　云才
ほ　此風やまちゝきゆくとはるゝん枝ゆくる花ゆくよ　徳本
〃　ゆくよ雪ゆくよ雪ゆくる雪風　衣別
梅　ふくゆをれふいとひろん梅ふ雪ゆくる　朔姫
〃　雪風のふゆくれきまんゆくてくく　雪民
六　雪風のふやとにふゆくてをくゆ　伊勢

○春望

そのうれゆくゆくるにゆくゆ
ゆくゆくるきゝふ

えをつくく　春ゆくく　新あけ
うちやゆく　をちゆく　春ゆく
ほのゆくる　おのを　雪山春ゝ

○二四

春はあけぬ　夕月夜
海ちかく　海をかすめる
浪ぢかく雲雀　浦ぢをちかく
神のもり　春の物風
梅の香　すこし冷ゆ
雲ふかく　八重の汐路
古　天ざかる世八板橋をおきさりぬる　春雅
汐　立ちかへる雲ぬく八重山ちかくみゆ
〃　菱ぢやふく枕もとへ入る汐をの汐
拾　春雲雲の九十九折なるうみぢ
六　西の海をみやるもすそ川春雲雲
〃　うすの山ぬくもりつる八重山のうぐひす　はる汐

巻之一

いく山かすむ　いく山かすむ
八重霞　八重霞
汐路ちかく雲雀　山ぬのさと
神のもり　春の物風
梅の香　すこし冷ゆ
雲ふかく　八重の汐路
古　天ざかる世八板橋をおきさりぬる　春雅
汐　立ちかへる雲ぬく八重山ちかくみゆ
〃　菱ぢやふく枕もとへ入る汐をの汐
拾　春雲雲の九十九折なるうみぢ
六　西の海をみやるもすそ川春雲雲
〃　うすの山ぬくもりつる八重山のうぐひす　はる汐

後拾遺集春の巻をみるに世八かすみこめたるもの　西言
〃　はるくと八重の汐路ちかく漕をれ行く春の雁　雅信
○霞一雁　人丸
秋の夜ぞ雁の来鳴ふ吉野山古郷寒く霜や置らん
越路行雁ぬ雲井よりおちくる雁の声ぞ聞ゆる　雅信
雁ぬ雲井よりおちくる雁の声ぞ聞ゆる　雅信

身を終て　秋と契りて　こゝに於て更に
雪む雲舞　散のそる　摸雲
紫苑ゝゝ　夜うの月　夜の
乃の狭　えだりう　雪をさそる
雪のもれ　梅の花と　風あるゝゝ
一つまた　にくまれ
散あるゝゝ　乃はとろ雪
雪をつゝむ　ほゝへまる　名ゝう雪める
雲まて　つゝむ　つゝき消り
あさゝゝ雪む　なみたりてる
雪ふるかな　松風よ雪かふ　つゝあるは
乃のうち　あれおくる風　雪庭のゆふへ
白のいろ　雪ふる　おきあかりて
ふり後の雪　けりくまく　雪もをれて
五十九首　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ

〃　雪すみくゝ雪ふる秋風まつ山を越てふるや〃
古　春ふれハ乃雪ふる野ちの雪のそりふるハ〃
〃　そる雪ふるをそてふる野ちの雪ふるハ〃
ハ　雪ふる乃雪ふるまゝふるゝゝ雪ふれ山ふる野　法ゝ雪
松　古法ふの雪ふるやはるをふるさん〃
〃　ふるまゝふの松ふる野ふる里の雪やふる雪き〃
ふ　ともくゝと思ひきつゝ雪ふるふる　雪ふ
〃　雪雪ふるひふいめる雪雪ふてふ雪ふ〃
ハ　ふる雪ふかくまつまてふゝゝふれ雪のそふ雪ふるかな　安基
〃　乃ふるをけ雪ふるふる小山田のなりふる水のうもれん　独言
〃　雪ふるをふるかな雪ふるかな　雪ふるかな　雪ふるかな
〃　ふりもいまいふ雪ふてふるふの雪ふふの雪ふ雪ふるふ雪ふん　赤染衛門

○春駒　そるのくら海
おまへ子てるにく春のゆきあはぬ
芦のはのくめるまちかをもむこまと約とくてもあり
あるく　いでゆる
春よいさふ　なるさまなつもむにさむ
あいさむ　をめくる　草つく
みちのく　なつくる　いとゆふ
海へとつさる　あーのうさま　つれね野へ
萩のやけ原　行まあさる　汝ふこま　汎よいをゆ
なもむ　尾花あーけ　をふちの約　さ野もの約
ゆきの多約　つるふちの約　かひの馬約　よめも行へぬ
おのの気　口のまま

名所　陸奥　山城　美濃　信濃　牧　小野　信牧　牧原
穂坂の牧　駒牽　今井の牧　信牧当時　若駒牧　信牧当時
信濃　駒牽時のまくらことば　小野の牧　信牧当時　若駒牧　信牧当時
〃　とこ野　海へよりて　野もせ　海へよりて　野もせ
詞　まこもよつ　野もせ　海へよりて　野もせ　信濃
〃　もえあるそ　野のこ六小さ　野もせ　芝生野
千　みくもする　芦のうきふや　あるえぬ　五月の頃　洗晒
と　小さ糸こうはみる　野よあるえぬ　五月の頃　洗晒
馬　野もせの野の約　野もせ　よく歌
〃　野もせ　海へよりて　野もせ　野もせ
○雉　きくいす　ま〜
子をもつ母し春をこまつの世もろもろまにはゆやけ神のきこえ

〃 主ひとりは咲る梅をそしらぬ実と又せくハなるをおもふ人 北立
〃 大梅をそしらぬと人ハいへと吾ハきゝしらぬをゝ
古 みよしの山へさそる梅をきゝてのそみやまふしまる 友則
〃 てまつまてもむる梅をとふてなるさふん 春立
〃 梅をゆくひとりもあらんゆくをゝ
及 さそてをるまくをしまの一枝のたてよ森もてゝ 兼則
〃 山里をもる梅か梅をにほひきよもれさま 雪
〃 もる事のうすくをきてゝ梅をやうく 仲立
散 降くるかゆきの雪つめるもこれ 躑躅
〃 ふるさとやくをのこかのこゝ梅ハきてそやけ 出雲
〃 来ぬ人をうらみてそをるきの夕をあるぬ山の梅を 元梅
古 山もさをしてうくひすなのまよへの梅おりて作者 素性

〃 ゆくむくの梅の雪をもをりて 作者
〃 あるぐ人もうく人梅をおりて待へき
待花 ゆきをまつ
きみまつ雪を梅をなみくゆきぬまれをおくをひへ
まつ 結ぶ
まつほとゝ 死をゝく
死のみをゝ いくくる
みやまの死 ゆくくる死
死結ぶは 咲やぬ
まつほとゝ 梅をもれん
雪のうの梅 咲くるの梅
まれをるの 梅をるの
雪のうの梅をおり 死やかい

万十 さまの事ども桜のうたどもへ
〃十八 吾背子がふきし笛の音ぞ
〃十六 妹が名は千代に流れむ
後 やどに立てて植ゑし桜
六 色ぬきに染めし心ぞ
後 如月の望の夜の
初花
さきそめし 咲そむる
初花の 初花を
見てもなほ 一本ゆゑ
枝ながら折き 色ふかく
後 風や吹きつらん枝ながら折れ

〃 咲ぬれば散てやゆかん人知れず
後 咲風をつらしとてこそ桜花
六 咲ぬれば散るてふ事の
盛花
多武峯ゆ 咲そろひ
白雲の 咲ぬれば
風もさそはね 散ぬれば
万七 桜花さきそろひぬる雑波の風
古 苔むせる岩ねをつたふ
〃 まちかねて今咲ぬらん
後 散ぬべき春の限と
惜花

○遥日　なぐさめ

なぐさむるのすべもなくてくらすをいふ

なぐさむる　なぐさむる

なぐさむる　なぐさむる

はるばると　雪など百里つづく

天のはて　白雲の

恵のつゆ　はやねの

なぐさむる　かすむ

六百　やしおうぢよ　おきな　おうな

〃　学問の勧めをいくつもなく

〃　つれづれとそうある山里などにおきてなぐさむるは

〃　秋ちかき夜のつれづれ　梅ちりぬまもなき雪　女房

〃　春のかなしの注やのあるべくもあらず　家作

○遊廓

いとせめて　かなしき

春よのつとめする客よりの文

の頃ほひ　こよひ来るやうなをいふ春の

おとせずて　風なきや　おそくゆく

いくたりの　ひとすぢに　こころぐるしく

夕日のさす　こころあせて

いつこまで　帰るべき　商売表

春の日ぐれ　暮れなる

春のいとゆふ　せのうかぐろき　侍人数
六　はるもくのそらにきふかうおのかけろふのいつもきりの空と成ハ
〃　そらふくみそれむそらそれとみるうちに
雨いつれくもひくれてうる雪ようみきハなるよりゆふ　那波
〃　そらふきまれにくゆふくもくおれこむ法宝ぼん　言水
〃　はるの夕の雪を強ミハ落うれうるなそもるにと思ハ　宗旦
〃　そらすれまの野路よあそふ系のふゆなきふのうへ　仕立

○春興

梅をみ一ぱいたうひ梅のもとめくれとゆるれそうみ
無をあそひをう
おもふそう　ふのあるぬ　まよそう　そうなあるね
ふれくもそふ　ふをはくよ　ふそもよう　まれのもき

花のもと　春もいつる　まれのうそうく
もみそうふいつへかる　まそう行
万五　あそ新梅そのえを折そし
〃　梅はかゆそる雪のまれをまれ　宗祥
〃　うまのそうふ新うたりて行まふ　古村
古　まれのいとよかるまれもそふ　法名
及　雪れゆるあふはそうれて来ぬ　つゆき
〃　あそう梅の月そふをおれ人まる　侍人
指　世の中よりまれハおもふまそ　侍
○雪　趣　のくのあそひ
まそのも来れるゆまてすそれつはそれぬきなそうてあそを
いふおもふそう神そ作それ永きりそ作ありくそし

三百のはるかなる十一桃の三千年に一度実のるといふ西王母話
菟の盤桃八二千年にて一度実のるといふ西王母話

八重桃　おいそめ紅　三よさと桜
桃の一もと　桃の宗園　そのみ共桃
まるのまゝき　千年を経る　えゝ桜のさかき
植ものゝさま　仙人　下てる桜
仙人　みるまゝ　峯〳〵の九
もゝさくら　やどひのくふ　空さへ雲よもふ
三月半　はてこつむ　けむのなれ
よもむさくき　やどひのくふ　不可りさくき
竜人の玉杯ふ　舟をとゝのふ　桃を九ひのむら
乙こうま　夕日歌詠る　ちれてる盃　むうの墓
名所　桃園　雨　こらぶ乙日　三月の末日　天の川宿　文曜日

みどの社は
五九　うらゝかに照る日かげ桜もちかな　松
拾　三月までになるてふ桜のこゝまで咲ぬ　芳桂
六　来ん年もあるべき身をおくて咲　つゆよ

桜

五七　はきやすきのけさも世をみる花のさかりやも　徒人参
〃十　雲やうのけさ計下よ月桜　〃
〃十一　やまのむろふのそ桜かゝけくいそて一把をかつぐ　〃
〃九　まだ開られなるに雨桜のもと下紐通よりてそくるくる　〃
〃　ひろまれすゝきの花をまねくかも　〃
古　あやうもものハ花てそれられまんまをそ〇ておもへ　徐雲文
拾　咲一時散てそ久しき桜のむちかな　徒人参

○菫花　菫菜　すみれ　つぼすみれ

すみれとつゞけてよめるもよろしからず山をそえて深山すみれともよめり

とみるべきなり山地之陰をすみれといふ

八古くはかすみれともあるをあやまつもじなり

花すみれ　すみれ草

こゝろもちきえうつる　こゝろもちきえ

昧ともそゝれ　身もすゝれ

姫のすゝれ　つゆそゝやと

草生　昧ゝ姫ゝ

ふる雨や　匂ふすゝれ

揚そゝれ　袖そゝれく

そまのゆふ　みどりの野へ

野をなつかしき　きゝしは明聖　かろくのつゝむ

あるもすそひく　松うみよりく　まゆねよはたん

うたゝ紀野へ　昼のつゆへ　雲すゝれ

名所　海岸堂森　こゝろ都

むさしの雲　依見野海　石田小野　日　春日野　日　未於都を

万八　春野のすゝれつゝにてそ数をなつかしき一本猶ゆかし　赤人

〃　法花経ぬく法華の三昧やすゝれいまさらくは　田村之嬢

〃　弘仁の修する野べのつゞすゝれ此野　言田女院

反　わらべ草の苑のおそろれいきやくる人やたゝるゝ　後撰

元千　こまひねて揚てゆんすゝれくたゝ小野の志ろみよ　国信

〃　道をこ入野の糸のすみをよ春雨ふりそゝぐら　歌合

誓　きゝしは石田のそのつゝ菫しめさゝそゝ野べ　歌季

〃 むら〳〵と蛙なきたつるの景のさまく〳〵哀
〃 淺ちふやあれこやとのほれる昔なれむさゝ
〃 ひの甘ようけるやとのそとあれまのよすゝ
○春ノ田 ○苗代
あら小田のさゝ原又田をすきうへ
とゝ苗をとる下をいふあら田をかへして後あら井をほり
川ある谷川なとを堰入落をとる料
ひろすきうへ 堰入る水 引くる事
水にまかする ゆるねすく しめさん
苗代垣 苗代小田 苗代る事
うちかへし 新〳〵の繩 すぢ〳〵
門田 いとまれき 五十串さゝる
そよもれ小田 堅沃の小田 入れせく

たまをゝし ひをそゆく かそひの水 岩まゝ
あせのあを あれきる花 みづ〳〵ろ稔 まかり入る
紛ふなゝろ 水ゆるふる まれ小山田 田中のみ
おそ〳〵く いかゝろ小田 まゝ田ゝ井ゝ
百ゝ所 伏見の小田 鳥羽田 砂田
住吉の岸田揖 布留の岸岡 茅
五 宮川の山田つくるよひて 古 まゝ
あら小田をひろすきかへして 反 まゝ
本のめる蓑れ山田をおこす 指 まゝ
笠引の山の裾の岩てそまろ 六 まゝ

六　つまそろふ　あきもちかづく　ゆふされば　佐久良
〃　おもふてハ　袖こそ秋を　まきれ田の　かくろへかねつ　今ハやめてん
五四　たもとゆハ　たゞそこはかと　うつろふ小田の　面しろ水の　冷まさりて　紀部女
金　暁の　ある里居の　小田をまもる　くなし
〃　山里の　そこもとゆく　小田の苗代　水をせき　落す
○雑
　このごろハ　かくしもあらで　あきかぜの　吹ける時よ　川瀬（かせ）をかつて
　秋ふかく　吹ける　河瀬（かせ）をかつて　ありしかど　いまもさらにも　いつまでも
　すゞく　あきかぜよ　なくらいつ　つまそろふ　もろあり
　あきもひる　なくらいつ

夕さりぬ　ほをさやけく　散をそやけき　上つ風
あきかぜの　吹よりそふる　ほろの秋　古田の雁
雨のふれる　みこもの　石井のうへ
てのもかの　池のてみの下　葉のうへ
色づくまで　井水のうへ　山のふもとを　うつろひぬ
あきおそく　いまだ小田　一株もよきに　忘草ぞ
咲にほひ　あせこそあれよ　谷川
名所　玉川　三輪川　初月　佐保川　日
あをの山田　よい夜の秋　佐保川　よし野川　末
万三　そもかゝる　玉川の夕さり　雄なく　稲のさやぎ　上古
〃　おもひつゝ　来ませる君を　待佐保川の　八つ手せて　吹つる　益人

五十 みしのくいさゝかなきこゝちはすれども 法歌
〃 そも我故よ袖ぬれ君きけかしゆめさまけくにのほつかぜ 〃
〃 眠をもやらぬ宵ごろもかさねもてる寝殿よかくはかなくも 〃
〃 よつ風よかうまでふみさくてこゝろみまうんかくこの 〃
反 ひやふかひやうて終性よるの影そや拍子打 〃
狂 海ふよ雉子くる山吹のうつろひやこんゆらむ 〃
六 きつねもかつまをこめて来なり 〃
〃 もほの人をもよるなく雉このタゝみハをしくやあるぬ 〃
○藥 法そえん つそくて秋さむるよるよあめ
つほえハ月といきちひて 春こそ雪の
なくつるめ かくつるめ
きるとて 法もあるる 春これ雪 ゆるみそこ
ふとつひ 那まよふ

久る時や 法そこにて つるあるこる 加そひ語
やとをつれを 二月のれを 家抱
来ぬまもや ふる法を まつ一まる 月をくる射 歌文共
五元法をめ来る射よ集めて 万
夫未めつしくつるめ新鶏よ来れハ書これよ万 万
〃 かそいろハあるれとみん遠さたあるハくよ書るぬ春を 法く歌
○鄭躅
六帳よ法くしいそつとつけくあるつてしハ今月にけく法く
しまてるけるをいひ安法くしハそりふさ法をおかしまの
まをとハつほをそつしとそて歌るて
志つ法くく 果はくく 花つく 姫つく
志つ法くく 果はくく 法しく系
もつつく いそつく

春山の咲る　嶺のさよおろ　松水之部
咲よわれ　いそかけ　下てる　なの部
うそもれる　赤くてる　かひろさく　くさをる

五二　嶺のうくひすなきあひをきゝみをき　大久保宝女
〃十　河流まく曽我の川の瀬のうくひすの古よ雪れゆめよく雪
〃　雪せてもうそうてふくハ梅山のかひ咲　岩の花のいそかな〃
〃　まゝのあくひすの花のまくうぬ雪よハ　ゝやよせめもよ〃
〃三　比なる新さくえて咲まあひすの雪　那　京指
〃　いそけのこゆ比水てまて咲るあひすのうぐひすを　伊勢
〃　きくのみむ雪うて比鳥うふれハあひすの花　伊勢
○梨ノ花　かくのも　ひかりの

万葉集よハ梅をみらせてよめる哥

春の花をよめる歌　嶺のさよおろ　松水之部
てくまその紙とそる手もむみよ返を受ハあくれハえんなよめく
そうる氏紙よかく歩をう
うる新　うる枝さん
雪よ例る色　ひさくの赤　なの部
古おもひ潟よかく枝さ　おもひ杉梨のなのも　大宝寺
云世の中をうくひすをハかくはんひさくの花　浅く雪
旅木のもとなるくてやはひさくひ新の花　都何
〃　はてハやま野の雪新咲よう　むうの門をとそえて　る事
○牡丹　ほうくんの赤
ふうくく比　うそもれる　雪のく　ひさ花るみ
え句　咲しよりもあそうるくうくうくなくよ花のをとほくサゅへよけの　吉原

○杜若　かきつばた

もろさしのそをめて夜よ拂つくも名の知れきよまりて

垣ほとゝの折てもよゝの澤よ植るれゝとゝ名せゝう

へゝ住る　ゆくゝる　池ゝ

澤水　沼よゝ　玉ゝ

陵澤　志ゝさゝて　波のあゝゝる

衣ゝする　衣ゝゝる

ゝゝ花ゝ　かゝれぬ　ゝゝ

ゝゝゝゝ里　ゝゝゝゝ　波のゝゝ

あゝゝゝく　にゝゝ川ゝ　ゝゝの里　ゝゝゝてあゝく

みゝゝ　ゝゝゝゝ　ゝゝゝゝゝ

名所　陸奥小野篠　こゝの沼　廣澤峯　依兒ノ澤ヨ

いゝほの沼上卷　陸奥　八ゝゝゝゝに　志賀ノ郡ヲ云

万七　岩ゝゝゝゝゝゝの杜はゝゝのかゝ　陸人ゝ

ゝ　里の沼の澤沢小野のかきつゝゝゝゝゝゝ衣ゝ拂つけきんゝゝゝゝ

ゞ十　衣ゝゝゝやかく云ゝきゝん杜ゝゝゝゝゝゝ

花の雪　　梅の山ぶき
枝ゝさそひて　　さそひえて
風まつ雪　　谷おちこみ
雪のおもり　　水流るゝ
雪ふるゝ　　人のつまし　　花のごとく波
雪ぶるゝ　　まがひ咲る
ちるゝふ　　波をうれぬ　　志つえの雪
ちりけり雪の　　川ぞひの　　谷へまわる　　やどるまでて
梅をふるさぬ　　川風よ咲る　　跡をゆる
名所　井出の玉川　　水　　大　　秋
神南備川　　秋
万川波さく秋ちひは　　新みえて今やはつるむらさきの花　　屋金
〃十　　花咲て実ハ秋ちかしとも花けよおもゆるかやまみねのむ　　よゝ
　　ふゝ

〃先　妹よ紙ぶすまとみ雪ぬれ　　水指
古　てもかゝ咲つゞみ人指のごとき　　〃
〃　雪雪よはまきもつのれくるまの香よくなつゝ山ぶきの　　〃
〃　十里河岸の山吹みち風よ　　〃
反　　散く雪ともをうれん妹なくて　　〃
〃　志のひるゝ咲て妹のをゝむをも　　公平女
〃　雪風八ぬとるゝ八重ゝ八重ゝ　　通昭
秋　雪風八ぬとるゝ八重ゝ八重ゝ　　補助
〃　山吹の花のさかりよ井手よ雪て　　恵美
〃　おもいて張てそふる山吹の花ころ　　元禄
ニ　ゆくとも咲えぬ支ぶを山吹の花　　要之
〃　雪降ゝ枝さしひて折ちひの　　〃
〇蕪花

古 よそてみて降ん人こそ春の空
ほ 霞やとのうけてもる花雫春の
〃 水底のそこまでうつる松えだの
指 はるの空しられぬ雪の名残哉
〃 雪もみれて惜むひなく春霞
云 まてゝ折さは流川の岸ろれ
〃 ろ所ま新をつゝてこもるさ
○暮春 ○殘雪 ○惜春
くくくくへ雪のまそへ三月の末の霞
のすくなきをいひ惜春ハ春の
此三紋大うさ切れんよ
さうらを用ひてかゝそくまみく教る所ゝ

ゆくはる
降るさる
すてる春
まれとも
ふるも残る
花をの降
残るの降
春ハ十日第ま
春もそへの
降ろ折を雨
いめる雪
えらぬ春
古 をしめとこと降る折くまを春の
○四九

やよひの末
えれてゆく
春のきり
いまゝる
あの月
やよひの雨
ゆくへの春
春もそへと
雪ま折ま向
春もいまゝ
ま折ま雨
夏もてのき
又来ん春
ゆくたとる

古　花ちるのみまつにあらねどもあくるまつ間の春もなくかれうせはて　深主愛

反　又もてんはそと思へたのみぬ秋ぬ　都守　つまは　をしこ　まさ弘　まさこ

指　もゝこれ秋ぬるやとはりまの古さとにて集めこられ

〃　風ふけばうつろふ色のあだ花をいつくにかこむ

云　留ることは咲散のさだめこれは悟りの者もこれぬ物はか

〃　まさはうねもゝ色こまさをきをちもこれくるゝこれ　淡雪

指　掬花匂ふかたうら大そらの春さをしく　おもほのれう郎　雅宝

〃　あらはきつまはの百よるかうすくなきさよやあぬ　米雅

○三月盡　　まのそらく

　　やよひのつこもり

　　春るまの影よてハやよひ卅日のあらしよ

　　うつろれとこ月ぬこはてもまれるまかきまち

　　くふのこもり　　まのゆくこ

古　けふのこと春を思ふ時こそ別の旅の空　羽恒

〃　春惜をなる春雪　花のあやく　やよひのつこ　引こまれぬ

反　花一あらしのこはさをてうむまこけふのうちおし　淡雪　いめるこる　まも加まりと

〃　きりめても春の限のくふれまくゆるさゝちよけるれ　露丹　春ぬ表こうれ　ひまもこれる

〃　こまて又あはこたもれ時よ集めまいふれぬ　ふつの

云　ひまれこうれ時よ集めまいふれぬ　母こ

　　春のこもり　こまこくも集めるこ春ふまをしこれ

夏の部

○夏

衣更日　衣の春　なごり雪
衣山の色　春の秋　麻てほし
衣の袖日　なつのあめ　衣うの山風
衣の袖　みず衣　衣更てハ
ちはける指　ちるさくら　ころも手ほす
○首夏。初夏。早夏　夜のそら　はつあめ衣
さ夜ハ明日より旧五月ぞ　ほとゝぎす　初音
ふるさと　玉まつ　初鰹
定家まで　郭公　ひのあ（火事を水をかけるまじなひ）
夏ハ来ぬ　ほとゝぎす　きよふの雲
松をはらふ　時の来る　衣うす
夏の月

去　行夏　惜春　むらひなく　けさ
〃　衣更のもとに　ゆきてこそ　つる
〃　惜むくちなしを　つんでこそ　ゆく
○閏三月　ゆくものゝよひ　羽恒
ほのやよひ　うき物の春
秋あのぬ　雪も立そよ
古　ゆく春を　行春
後あるもの　ゆくゝ　ゆく春や八せを　伊勢
〃　ゆくも人のこゝろよ　うき春あふさか　雅之
〃　ゆくも社とゞかる　ゆく春を八　左大臣
平安の春　ゆくかひもなけれ　ゆく春
園三月尽
指　ゆくも名残のつる春を　ゆく春の名残を八つゝしてそ　羽恒

衣のそで　恋の部　きぬ〳〵衣　うらきたると

なれきつる　うはう番

衣ほうばん〳〵　揚をうつる　御ぶとんの白う孫

まをとをする　をしむひれく大ぜんの白うめ洗〳〵き

いてきたまぬ　死のうもとをうふ　強勢

反　ふとうハ衣のそろもよちめまとれ衣のそで

指　死のきよ降〳〵するものをうれ　すのふ

、　雪ちらハさゝ神も恋の部のうた

、　袋雪といとひ事を衣衣さは　繁盛

去　まうれもまう〳〵をる太いてうふ揚〳〵ん　赤牡

、　夏衣たちきる七夕をを坂の実の清水ハさひくもつる　妻之

元千　夜衣死打さるまぬきうて来のそで見のそで洗〳〵き　追廃

、けさうふ恋の部　ゆきうれハたよそのうれ　物

ゐいつかうめうふのうもれ時うふ

○錬玉　。残雪。　。連擲

衣よいつく咲ふをもまうふ

かうみうてそ紅うふ木うく宜〳〵

打そさうふ　咲のうる　雲物語

る打うふ　咲おうれうる　女打ふまうふ

添山まする　まを散ふ帯一里

衣の打うふ　衣の打うふ

まを打そうる一本　打そうる一本

添ふうふも　めうふしき　衣ふれて旬ふ

衣のうけ　おうれて旬ふ　名のうけ

夏ふ恋の連掛　夏ふまする　風うふれを

うるへ

新樹

元
玉 玉相庵の梢をあらしはらひて秋ふかき
〃 ふる山の松のあらしを吹くしぐれ 冬季
〃 おのづから指もさすらん朱の玉垣 院
黙雲 庵の前八角井戸ありて白川流
〃 れあり庵の本間も表ひのくま天照す身の影そふ鏡来 よし
言 き海き時上のくに於とみ海とみ深にやとれ本来空のう 詠者

○葬死 それうつき
うせぬともうつきとともいへ今世よりうつき木八第振うつきと
いつもあるまくおとゝ名のそれ八有まゝとへきまゝまゝまゝれ
き波さう世る梅なとさ海くまあう又憂(ウ)ともかそあう
うつきぶ 川ぶひうつき
うつきぶ 垣
命月の死 峯の命 哭(ナク)のむ 命死の死

巻ノ二

名の命死 もとの命 命死ム 山ム月の垣ム
咲もる 死と性うう 哭泉宇ム生 雪ム命
垣のつき ふまあ雪う 八雪ム月命死 法生来ぶさせる
かふふあも 命死月夜 末下月夜 さうせる命
おくおき波 然の種き きまゝもの雪 かけの雪ム弱
命死の命う 時死ふ雪 枝ふうむ 命死のまゝ死
白ゆふうふ 雪の雪 雪ム命の末法 ふうあゆう
ゆふうふう うの雪の法 命死ふ月 末間の月
時雪かふる 雪をう社雪 あれうの雪 月をう社雪
おふくよ咲

名所 宇治里ム峯 桂ノ里月 加茂川月 岩作ム月
音羽ム日 玉川ノ里誉 住吉ノ岸月 吉野ム末 和泉川月

五十嵐ぬまをそめける布を
古　学の布をいとゝあつく〳〵の字本と布のなる仕方のさまを物りけん
後　時うたふをうたふかとうたふまでは指もうたはれ
〃　白こと白ふ指のの布のくもきくくふひの好きられ
指　ふる陸の指もは候るあむハたうさへのたろもかまくそ、
〃　絹あるやこの布をあやうれまは　是之
〃　布死のはるあるやきくねゆうはぬとおろうれうをそ
〃　絹まるお身ふ候るあ死ハ白くもきるふけさるかる　納拒
六　却こうの名ハくも拾うお布のそ契ふハえけれ
〃　久ふ又後もまれ白くこの布死ふ布やとまそ　つま
〃　陸指　雪まあやまされてそ布とみはるさと　白陸
子　却りくは候る指のの死ハ本はまの身のくこちそまれ　歌婚

○葵　あふひくさ　もろまき
かく我まつりまかくかく松尾の社司まつりの第日よりまでる
一きゝ〳〵葵をもちうたりもろこと八杜木(カツラ)の枝もあふひをも
うけてかざしをゝ氏人のかざしもかくる祭りの
二葉のあふひ　かくる　うたうみ
みあまひくる　ふのあひるる　神まる
くさまあふ　ふのまひくる　祭くけくる
ふのまのうち葵　きかけ山　日影よかげる
をゝのあふひ　神山　くさまのまも
神をゝくる　もろうて　二葉ふれうけ
うけくふのる　あふひまうまる　敬雪
名一ツ　神山葵山日　清香山日　松屋山日
六　もろやまの神のまもまを第ふもまをうまる祭かさく森　清人

云 思ふ事ありて我もれいあらぬ
人もなりてゐたるに 法人ふみ
え千 あまひそ 四百八井のそこかけて
井吉 いくかまでその井のあまひそ 小倉池
新勅 うけく 行くその井の山くとく 雑種
恒百法人のさしあまひもそやさ詠 犯及
子音ちはや 詠世をかけくてひとり 永隆
○郭公 ほとゝぎす
ゆふを志のひきたれこめて 身
とゞろかす 郭公 和泉
おもふあり 詠をのみそ 時
よまれの月雲間なき 詠

志のひき なく
なれる すゝる
つるゝよ もらん
くらふ 人住く
里とく 身なれる
あらめを 雲のゆ
きもらく 詠
さよの一声 和泉
あやめのみぎる 郭公 橘
さ月やみ 住くれの空
なくれく里 郭公 永隆
ふゝくる 枝のもりを
くそれ時 さ月雨

古今集巻第十一　恋歌一

〃　おもひそめてもいふよしもなくてやみぬべきかなしき時もなくてやみぬべきかなしき時もなくてやみぬべきかなしき時も

なのりそを　まそでにかきて　おとつまぬ　　宇治川の名
結ぶ手の　まそでのみえて　あふをまつむ　　天智
いつを末　なるむ　まそでかな　　紀貫之
結ぶとて　ふしきせよ　　
ねぬ夜つもる　結ぶおもひを　　
五八　吾やとの梅おしてふ物ゝ名ある此名ともの勢　生杖
〃　名ばかりをたのめてきぬる　　家持
〃　時鳥まてと来れるあやめ草　　結人妻
吉　ほとゝぎすあやめもしらぬ　　紀貫之
〃　ほとゝぎすあやめをこゝやぬ　　紀姫
〃　さ月まつ花たちばなの　　伊勢
吾　結ぶてふ名をおもひきれとも　　結人妻

紀　まそでにかきてなんおとつまぬ　　宇治川の名
〃　名ばかりをたのめてきぬる　　家持
〃　ほとゝぎすあやめもしらぬ　　紀姫
〃　さ月まつ花たちばなの　　伊勢
○菖蒲　あやめぐさ
沢潟おもてのちくとうの名草にと
書の居き松のもさ行やめをきて歌を
さ月まつ花たちばなの　　伊勢
ふるさとにかけうつしゆひ松　　
あやめぐさ　　
花あやめ　　
てのみ　　
みさハのあやめ　　

かりそめ　　なやめる　　ひさしくまちわぶる
引ほどく　　海きてひち
ほろぬれぬ　　ふしそをぬ
ほさぬ袂　　やとのつま
秤のつま　　松よゆふ
汲の岩垣　　庭のいけ水
さ月のあま　　あ一つるよひく
寄そ〳〵　　その尾　　かりそめる
よもぎふのやど　　みくさ
名所　住の江　松原　玉江　日
いくよの沼上を　あさる氏沼葉奥
浪聲と山蔭　笑夏の清水　日　益田ノ池　来
百九首云〳〵　来ぬる夜かつらくてよかりしは　俗歌
松　まつのみどりそまさりあやめ草　俗歌
ふかれぬおもひそまさるあやめ草　ねのみなくらん

巻ノ二

ふる里も緑やのきあやめ草　ひくらしぬひくらしぬ
〃　あやめ草　ねきこそれ　海ものつれ　もちぬ　みそく
〃　なのや　そよ　ふくよのき　あひぬ　ふんそ　ふ　俗歌
〃　さ月てふ　ふ月にあへる　ふかあやめ草　ねもそ
〃　あやめ草　ねもき　気つけ　ふくそ　ふ　なれ　人の　ふらめ
〃　みくさ　ふる　さ月の　ふあやめ草　ふ　ふ　ふ　ふ
〇五月五日　いつくれ日
なのあやめ　ふくひきて　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
ふ　ふひて　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
さ月のふ　さ月のふ
秤のあやめ　なのやめふく
ふ　ふあやめ　男士のふ　ふ

久保の白壽　くすのは　橘を見ぬく　袖のあやめ
あやめの軒ゆ　なつくのひもう　あやふくく
まだかくみる落橋こそみよのうてかくみを
詠まろこしのあるの
五十　旧とまあまあくまも新も濁ろうつくせんねてゆるされ　後人書
旅　空月のうえをそそやめのそのねうたてくちつく　延元古案
ぐ　くまくみそのきいつうれん　久保田
云　おくきえ旧ともこえあやあそけうりけぬ人ハあくな
〃　さ先ともねやれまくこのやあそ　とれ
ほ橋つまくおく旅きぬハ五月雨の軒のあやめのしつくちうやう
○擬　○盧擬　久保田
二郎ともはくこえをそそよなくまろきさきもの橘をなつ先のの
橘を見ぬく　袖のあやめ
あやめの軒ゆ　なつくのひもう　あやふくく
まだかくみる落橋こそみよのうてかくみを
詠まろこしのあるの
五十　旧とまあまあくまも新も濁ろうつくせんねてゆるされ　後人書
旅　空月のうえをそそやめのそのねうたてくちつく　延元古案
ぐ　くまくみそのきいつうれん　久保田
云　おくきえ旧ともこえあやあそけうりけぬ人ハあくな
〃　さ先ともねやれまくこのやあそ　とれ
ほ橋つまくおく旅きぬハ五月雨の軒のあやめのしつくちうやう
○擬　○盧擬　久保田
二郎ともはくこえをそそよなくまろきさきもの橘をなつ先のの

五八柴宿階下の橘と山橘とらふ義楫まれてあやくよあつ

かをる　袖の香
そそれそ　軒の橘
古月まち　そそれそ
むくきのよ　古月まち
ぬ　もそ井の色　橘をぬく
袖そそ　もくかう　袖のあやめ
そそる袖　なつくく旬ふ　古月雨
袖の香　夕風　ちそ死やまう
旬ひさやき　小雨の降　袖のあやめ
おそうそ　うるおきて　ぬらす袖
下照る　旬ひさやき　下てる袖
かくくのこの夜　橘をぬく　橘のあやめ
　　あくふの終　里をかくくく
　　てれる橘　夜さく死さく

こそ桜さく　風のゆくへ　あてもち花　橘のたゞ香

うぐひす　ある竹や　世々のこゝろみ　実世うぐひす

もゝつたふ　とこはのま　たてはの橘　ひくてう

名所　吉野　初瀬に花を尋る里　橘寺

万十　風さそふ香を橘を袖にうけてまつ夏の

〃　ひまてそ八重ふく花のそれ橘を見よ八重とや

〃十五　吾やとの石橘八いつこうつろふ苔むろと

〃十八　橘八花まて実まて見ましやは　家持

〃　大空八花そ昔の袖の香に　橘のたゞ

〃　橘のたゝ香そ昔恋ふらん　重成

〃十九　薗ふかみ花ちる橘うぐひすに　古今八重

古　昔ぬし忘れぬ橘の実をうけ八もゝ代の人の袖の香もよそへて　よみ人

八重ふくかぜのまよひきて人のそてをそかをらせ八かへる

云　たちはなのかをかきつゝまつ夏のよをあかすほとゝきす

後拾　さつきまつ花たちはなの香をかけ八むかしの人そ

こひしき　花たちはなの香をかきつゝまつ夏のよをあかすほとゝきす

〃　さつきまつ花たちはなの香をかけ八むかしの人そこひしき

○早苗　さなへ　わさなへ　さなへ取　苗代

苗のまくのひろさをもつ田八十代田ほとゝきすなく五百代

十代あまりをいほ田とも八神代の田のさなへとるらん

さなへとる　うゑ田　ゆふてよそへて　うたは

さなへ取　作田　ふもとの里　植田

さなへ時　作田　門田　苗の女

○五月雨

五月雨の雨をあつめて早し最上川　芭蕉

五月雨の雨をあつめて早し最上川

五月雨の雨をあつめて早し最上川

五月雨の雨をあつめて早し最上川

やとこそねそな　おくろうじ　柴の戸
いくさ　　　

○蚊遣火　かやり火

巻ノ二

○夕顔　ゆふがほの

ゆふべごろ白く咲ていやしき
垣などにある又家ぬしを
さくある歌也

花のタベ　咲そめて
きえぬ雪
ありとも
紛ふ方の　影のタ良
夕顔の花　方のすゞ
よそめゆゑ　よそめもくるし
まがふ紛ふる　色そえて
まとまりて咲　雪の姿
きえぬ人の袖　そめよ

かきほ　紛ふ雪
ひくみさ　井の子
紛ふかさ　ふり咲そふ
咲そふる　やどりゆふき
雪そふる　雪そふりく
ほのそふる　あさつゆを
ゆふ紛ふける　影のきま
紛ふまぎき　ふせや

きえぬ人のひとつ花　夕顔の花

〃　夕顔ほどなくしぼむ花

〃　咲あかしたる夕良のよそめ

〃　よりてこそ　夕良のそれかあらぬかの夕良

我古　白雪紛ふ　ほのぐみえし夕良の雪　古歌大意

井なほどくまで出んやそいん白雪の

ふるさと　咲そめて雪のまがふ垣根の雪は　垣根の雪

〃　夕ふぐれの雪は　紛ふ雪の夕良花　雪夜

〃　咲そふる　雪のまがふ垣根の雪　夜陰

〃　雪そふりて　ひとつ花　雪

○百合草　ゆりのくさ

さゆりの花　花ゆりの

ゆりのなかれ　もゆるなく

五七 その〳〵おそき原ゆのむろ〳〵よ書ていつゝ 後くもち

〃八 るのく神そこなくる妙ゆうの 松と源女

〃 やきそまるやと神原のまゆうる 紀考の

〃十一 道の〳〵のそのみつゆうのほまち 書

〃十六 あるく女の主人くまゆうくる 書

〃 まゆあれゆうくあるくくるいあやま〃

〃廿 はくる称のまゆうのまのゆくれ 千文

○蓮 そもく

そくくのくあるくるまでみるくるもくくまを

もあまとめてくあり又佛役よりてあるもおそし

たるく葉 うまく葉

なりく葉 わく葉

さそあれ 葉 まそくる はのそもく 赤のそもく

葉のいく 風よくる くのまく

池のそもく 入江のそもあ 夕風くよ

池のそもく 池あり池 波くく池

やそもく そまくく

ふきよく 名所 菅田池 植田池 住の江 杉原

百六 久くく社もあくぬる葉まなれまのたまよ 紅葉 葉

古 そもく葉のようふ まぬそもて 通昭

六 葉まそくれきあるそもれあれ 後人 系

〃 葉そくれあとなつるそもくあるよあのあるを入てそや

〃 え 玉 こ須まる池の葉の白露くきまのるくやる葉は 後

〃 久されハ波くく池のそもく風の浦さ 葉

坂百首 [illegible] 仲実

〃 [illegible]

〃 [illegible]

○氷室 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

〃 きくらげのくさきも古世の老ゐ木に於ハ多も夜のものとこゝろえ 敬仲

〃 夏の日も影ハかたむきぬ松のきれ〳〵なれやあまのとまやの 敬季

○蟬　せミ　うつせミ

せミ日ハくれて古ハ六ツそをたゞハ蝉ちとたゞハ蝉ちと

世の中ハ忠日々々ハ秋の風よもちまれハきくこゝろ

うつせミをうつせミとゝふ

せミおもれハ中おゝの時ハ法ひよ蝉の名をしてあるおり

きゝくらく　鳴くうつ

かうかう　蝉さゝく

せミの羽　木うら秋

夕日哉　おゝくゝてなく

楢よりく　木ゝるゝゝる

せミのむく夢　蝉のこゝを

春もすゝき　下ゆくうる

松風さゝよ　音近なく

雪ちかき　松の下陰

川ぎよゝ　木陰ゝ

陰のひき　秋よおく雲

鳴ゝすゝき

名所　庁家の杜鹿　衣ゝ

木ゝ後の川　住居　ちのうこゝ

至二石ゝる陰ゝゝうよなく蝉の初ゝ　後く雲

古陰の木ゝ小ゝ初ゝきゝなゝ衣ゝ　名別

後　京陰のむゝきかゝよなゝ　除哥

〃 雲ゝ初ゝ夜のそゝ松ゝ垂雲のゝ　ゝゝ

六　あられてふくハれくるそ格のかく
　　秋をさけきの夢は明をの
〃　ちく格のまくもすくきタをる秋のたゝ
　　頃しく指るかな明格のまくのつ通　後拾女
〃　時雨むひまくれなくれをよやくく結ぶ浮ひのまく　後位
〃　格ちくき本くの指は風てえて下ようつる格のこるく　京後

○夕立　ゆふたちの雨

ゆふたちのそてやてるりさな又いまく降けき
をよそとうみるふをもよめのとくく郎女の家をまへ
るゆく　きれゆく　きそ降おく
きまよふ　風きほよ　風おつる
一ときり　をる秋　いなつま

風すくる　きすくる
ふるおと　風そふく
まちこゝみ　かき手り
かくるゆふを　うつる夕立
きほふ夕立　ゆふ川風
波もの立　帝人さわく
こゑさハ時て　あしくるる
雲こほる　入日をうつし
一もとの　末　よそまつ
虹の立　山川のよこる
雲もところ　くきをへて

降ぬて　みるうの
時の雨　そ行まる
叶ふる　あまさき
夕立をそ　夕立のあと
きほふ谷川　まる谷川
波もの立　帝人さわく
こゑさハ時て　あしくるる
雲こほる　入日をうつし
一もとの　末　よそまつ
虹の立　山川のよこる
雲もところ　くきをへて

云 夏衣うすきひとへ物 秋さそふ風のやどりかな 季之
〃 金 うなゐらし紙みの帯をゆるくしめ 孔雀楼
猿 夕されば虫の音小萩ちる露の 九介
玉 うるさのこゝろの秋を吹くしる 笠季

○夏 夜

さゝきやこのあやめもつぬんでる 季之
秋ひてもよあれと月のうすもよあり
うすく紙のうす みそて女夢 ばゝあるくるゆめ
よひちう 机をたゝ 坂やつる
清水の浮枕 いなつま ねやへすいつぬ
枝の声 ふをあかちう ほとゝぎす
古 うの花にうすよひちうのゆめ 定家

巻ノ二

〃 うす衣のうすひとへ物に一またあらはみえ 季之
後 みひらかせそひきま板なき 後人
枝 夏の夜に蚊をにくまれお初 後人
云 白うす衣ぬくかとすれ 後人
云 みゝうをよりぬそ 後人
〃 久すみ初やへしぬそねの 孔雀楼
〃 うの花にほとゝぎす 定家

○夏 蝉

ゆふのまくらきよをもとめ
七又ハうの花の秋すゝしき
暁 おきる 初の月
衣のうすき 袖のうすき

○泉　いづみ

いづみ　いづくよりか水のわき出でそこにあつまりたまるところをいふ

みなもとよりながれてゆくすゑをもいふ

板井の水　いさ井

石間のみづ　まし水

きよくすゞし　いくむすび

志ら玉の水　いさゝかの

山ふかき水　こゝろづくし

名所　石清水　春日の

いつゝの末　杜風の

いさゐ　せき入る

杜のしづく　清水の

すゐせんの水　杜の木

名所　石清水　春日の　亀井　若狭

むすびの宮を中とせる事と思ひあやまりて宮ばかりの名所と心得ぬ

杜　杜の宮の前の水を流れとせる事と思ひあやまりて宮ばかりの名所と心得ぬ

ほとゝぎす　ほとゝぎすの鳴くころは水ぬるむ故に水辺にかたらふと云ふ

〃　夏の日も泉のつゝみせきかくる　昭教

〃　夏のうき世を忘れかな清水流す板ハ引仲

〃　流すなよ泉の風に吹きつけて　紫雲

〃　むすぶより泉は秋ハすゞしやどり　亀泉

○納涼　もろ〳〵

あまつさへ西北又風もなひ所ですゞしさもひとしほ有あふぎをすてゝみるとゝもにあつさをわすれるこゝろ

哥のこゝろはあやまつてすゞみをわすれるとよめり

夕すゞみ　紀友則

おそくまで山の井水にすゞむかな

すゞしさを　河風

はるかなる　壱岐の守

夕すゞみ風　村雨の風

松ふく秋の風

すゞむけふ　一本すゝき

はるかなる　風のしらべ

あまつさへ　柳下

立ぬるも　松のした風

苔のした水　夕すゞみ

木ぬれ　せきこす水

池の蓮葉　松風や松のみどり

すゞむ　夕すゞみ

岩ほより　蚊の羽衣

さゝやきしく　夕立の雲

井のした風　松のした水

うつゝ山　松のしづく

松　夏山の陰をしけるおかこの道ふかく　夏之

〃　山ぶきのさきそめしより　新恒

〃　夏山風　山ぶきのさきそめしより　後人歌

〃　清水ながるゝ松のした風　夏之

[illegible]夏夜ふけて涼を[illegible]の柳うけすみきりて[illegible]ぬ 赤
〃 名山のなつ[illegible]秋をそそくさ[illegible]秋のこころ[illegible] 秋郊
〃 ほとゝぎすなくやみじかき夜の[illegible]秋やきぬ 堀川
秋 きりぎりす[illegible]の水のぬるむまでなくらん[illegible]ぬ 安永
〃 岩もまた夏をわすれぬ[illegible]ひて秋のゆふ雲 俊恵
暮 秋風ぞ吹[illegible]ひて秋を[illegible] 俊恵

○暁夏 ○秋近

雨[illegible]れ[illegible]ぬ[illegible]六月の[illegible]
[illegible]
秋ちかき 秋の[illegible] 元禄
名ばかり秋[illegible] [illegible] 文政
夕されハ 名ハかりあり 一本をこむる かくすゝ記

まくさに秋 秋をそひても 夜もすゝ 袖もおそゆる
秋のさま 西山宗因
古 夏と秋と行ふたりの男哉ハ 古今誹諧
云 [illegible]ハかりすゞしきかをやかさむ 羽紅
〃 西へさしてゐるのつよせハちかひつゝ 〃
〃 夕ぐれハいかゞそやちかん 〃
金 みそぎする汀よ風の手はきハひ 〃
子 夏衣すそのゝ事をおもひいでゝ 〃
〃 秋風ハ[illegible]ぬんまくに[illegible]きまのさゝ 〃
玉 [illegible]ぬ[illegible]て[illegible]ぬ[illegible]ぬ 〃

○夏 稜 六月稜 ちゝ[illegible]

此歌より芸和稜ゝゝ秋のあきをやゝゝとひ又名越